

次郎がノリの傍に来て言った

「ご苦労さん、一年振りに聞かせて貰ったよ、でも新鮮さは変らんよな、三十分のステージ趣向を凝らすのも大変だろう」

「好きなもんは好きなもん、大変じゃー無いよ楽しみだよ」

とケロツと言った。

「ノリさんはケロツとしているけど衣装代や、曲のCD集めやらステージの流れやらで大変だと想う」

「こないだ、まりさんがカンパしようと言ったの、そうしたらきっぱり言われた、歌が好きです、こうして歌わさせて頂くだけで充分です、その件はお断りしますと言われてしまったよ。次郎、礼を言うなり何とかならんかな」

「その件は黙っていよう、先行ききっかけがあったら話してみる」

午後九時をチョイ回った、ガキさんといっぶくの関係者だけとなった。

まりは表に支度中の看板を立てる。

「みんなこっちに来て、サンドイッチとコーヒー淹れるから、みんな夕飯未だでしょ」

まりの声にテーブルをカウンター前に運んだ。

「次郎、厨房とそのテーブルは残して他の灯りは消して」

ハイと返事し立ち上がる。まりはサンドイッチを大皿に盛り付けて、

「サアー、残さずいっぱい食べて」

と言い皆と一緒に座った。

「ノリちゃん、今日も有難うございました」

「まりさんそんなことないよ、自分の方が有難うございます、自分と次

郎にまりさん、そしてマキちゃんにカナちゃん、いけないもう一人居ましたケンジさん、チームいっぷくの面々に、感謝に尽きます」

とノリは瞬きもせず言う。次郎は相分かったとでも言うのか一つ頷いた。

「でも次郎、雪山に籠城し何やっていたの、そっちの方が気になる、一年分の事件を持ってきたのと違う」

ノリの不意打ちに次郎は珍しく戸惑った。まだサンドイッチが山のようにある、食しながらでも聞いて下さい。次郎は今迄の経緯を話した。

「で、引き受けたの」

ガキさんが右手にサンド、左手にコーヒードで身を乗り出し聞いた。

「引き受けなかったと言ったら、嘘になってしまう」

「どっから攻めていくんだ」

「菊田さんの警備状況及び盗人は、近々進展があると思う。その時は連絡してくれと言ってある、あればその辺から攻めていこうと想っている。健斗さん、射殺も函館南署から連絡が入るようになってるが、昨日の電話では犯人はどっから来てどこへ行ったか不明。又、釧路漁港での件は持主が判明、間もなく経緯が分かつと想う、釧路空港駐車場の毒物事件、マルガイは東京都小金井市主婦と」

「自殺他殺どっちなのか」

とガキさんは言った。

「函館南署経由だが目下、両方で捜査して居る、今北海道の事案で分かっているのはここ迄」

「北海道で起きた三つの事件、何かピッピット閃かんかい次郎さん」

「さつきも言ったと思う、北海道は連絡待ち、自分の手の届かん警察署、情報待ちでしかない。身近な盗人の方が先だと思う」

「拙者に何かできる事は無いのか」

「ありがとう、今の状況では頼む術がない、出て来た折にはお願いする」

サンドは最後の一行になった。マキとカナにケンジが任せときなとも言うのだろう、三人の目が言っている。菊田邸の盗人だがと前置きして次郎が言い出した。

「犯人が仮に小泉昭一だとする、縦しんば何故、金品を盗まなかったのか、単独犯にしては可笑しい、小生が思うに複数犯ではないのか、小泉昭一は盗み物に明るい人と一緒に、チョイスし探したのではないか、盗人は一分、五分、掛かっても十分が勝負と聞いている、皆は如何思うかね」

「拙者は手口から見て、小沢正一と想うのだが複数犯は今一、トイレの窓から侵入したとする、大きな人だと、出入りに時間が掛かってしまうのではないか、が実際の所は分からん」

「まっ、岡山警部からの連絡待ちだ、ガキさん、阿寒湖土産だ持って行ってくれ、手塩に掛けたニジマスの燻製とワカサギの甘露煮です、まり、ガキさんに包んでやってくれ」

おい来たとしても言う様に、まりは帯をポーンと叩いた。

「遺憾、日付が変わりそうだ小生は構わんが 皆は明日がある、この辺で開きにしよう」

と次郎は立ち上がった。

翌朝、散策を終へまりと向かい合って朝食中、ルパンが喚いた。

「次郎さん見つかったよ小泉昭一が」

と弾んだ声が聞こえる、岡山警部の声だ。

「次郎さん、午前九時から取り調べが始まる。組犯対策の太田課長も同席する、ミラー越しなら観察は可能だが、どうだい来るかい」

次郎は即OKサインを出した。

「鬼デカさんではございませんか、おはようございます」

と、挨拶される。岡山警部に案内され取調室の横の部屋に通される、組犯対策の太田課長さんも入って来た。

「組織犯罪絡みで私が取り調べを行う予定です」

と言い始めた。

「盗品から小泉昭一の本心ではなく、目的が他にあったのではないか、私はそんな風に想うのです。次郎さんは如何見ていますか」

と太田課長は次郎の顔を覗き込んだ。

「小生は今回の空き巣は単なる盗人ではなく、組織絡みな盗みに想える、小泉昭一は腕を買われ、指定した物品を盗み出す様に、言われただけなのではないのか、単に組織に利用されたか、ではその組織とは、縦しんばこれからの取り調べの、成り行きに注目している」

「次郎さんはそう睨んでいますか、私は取り調べを進行せし、結論を出します」と、太田課長はいった。

「現役の皆さんは当然、取り調べ前から暫定でも結論は出せない、それが普通であり、小生みたいなリタイア組は、いきなり結論を出してしまいます。

ご容赦を」

「いやとんでもない、あつ九時だ岡山警部の取り調べに注目しましょう」

二人は肩を並べてミラー裏に立った。小泉昭一が入って来た、想わず次郎はあつと声を出した、ライトグレーのダブルの背広に、高そうなネクタイ、靴もワニ革だ。頭髮も七三に分け後ろに流している。大手銀行の取締役の様な容姿だ。

「あの男が小泉昭一ですか」

と次郎は太田課長さんに尋ねた。

「はいそうです、盗んだ物を渡したら封筒が手渡された、中に五十万円入っていたと言う」

「身だしなみを整え、昨日は場外馬券場に行った。大当たりだったそうです、昔馴染みなごろつきと朝まで飲んでいましたそうです。杉並区松ノ木のアパートに戻った所で、張り込んでいた捜査員に確保された」

「あの容姿じゃー街中で見かけても分からんよな」

そう次郎が言った時、岡山警部が小泉昭一に住所は名前はと聞き始めた。

「小泉昭一六十七歳、住所は杉並区松ノ木」

としゃべった。

「三月三十一日午後二時十五分、調布市仙川町の菊田邸での空き巣、その時の状況を聞きたい」

と岡山警部が言う、少し間が開いてから小泉昭一は話し始めた。

「出所してから、杉並のアパートで暮らしていた、どこでどう調べたかは定かではないが、裏道のみをあるく様な人が現れた。指定した家に空き巣に入ってくれ、礼は十分とは言えんが出す、請け負ってくれるかときた。凄みが

感ずる、断り切れず承諾した。三月三十一日午後二時十五分に、シマホ駐
車場で、向埼徹也なる人物と合流せし、合言葉は山と川だと言い、前金と
して五万円を出した。多言はせずすぐさま引き上げた」

「その時恐怖心等無かったか、そのまま当日を迎えたんだな」

と岡山警部は聞いた。

「怖そうなお兄さんだったが、すんなり受けたので別にどうのこうのとかは無
く、シマホ駐車場で向埼徹也と合流、想像より小柄な人だ、部屋に入ったら
俺が指図する、それ等をバックに詰め込んでくれ、と言った」

「その小柄な男は向埼徹也と言い容姿はどうだった」

「背丈は五尺三寸程度で細身、一見カジユアル系、菊田邸前に別方向から
自然に合流、今だ合図して来た。右手からトイレ横にガラス戸を開け、向埼
徹也を先に入れた、小柄細身だ難なく入り込める。続いて俺が入る」

岡山警部と捜査員ん等は、黙って小泉昭一の話の聞いている。

「向埼徹也は、バラ銭貯金箱や高価な置物には目もくれず、パソコンやカメ
ラ、ファイリングをバックに詰込め始める。永くても十分だと俺は言った、
向埼徹也は返事するでもなく無言で物色している、十分待たずして退散の合
図、トイレを出た所で表通りを確認、向埼徹也は何もなかったが如くシマホ
駐車場方面に行った。

俺は、盗んだ品々の入ったバックを持って、仙川駅バス停に向かう。三鷹
行きのバスに乗って、三鷹駅南口に、予てから話が合った女性を探す。その
人物らしき女性と目が合った、例によって山と川。バックと引換えに

茶封筒が、それで今日の事はすべて忘れて下さいと言った。女性は駅近場

の上水脇に止めてあったBMWに乗り消えた。

「そこでおいらは茶封筒を開けた、ビツクリ五十万円が入っていた」

それから今日までは、何していたと警部は言った。

「ついでいるとかな、競馬やったら大儲けした。如何だいビシツと決めた俺のスタイル、とても盗人には見えんだろう。一晩中、仲間と飲み家に帰ったら捕まっちゃった、何か質問はと警部を見つめた」

予期せぬ小泉昭一の問い掛けに、岡山警部はたじろんだ、気を取り直して向埼徹也に言った。

「三鷹駅でバツクを渡した女性について、特徴を教えてください」

「さつきも言った様に、向埼徹也は小柄で細身、カジュアル系で二十五、六歳と言った所、女の方は帽子を被って大きめなマスク、歳は不明だ。それ以外はここかしこにいる今風な女性の服装」

「モニタージュを作るんだ、その時は詳細に頼む」

「俺の記憶は良いとは言えない、それでもよかったら協力する」

その後、取り調べは繰り返し確認し午前中を終えた。捜査課に戻った警部に、次郎は声を掛けた。

「お疲れさまでした」

「盗人は二人だったとは」

と岡山警部は苦虫を噛み潰した。

「警部、警備の警官を起こるも前にも言ったが程々で、何時までも引きづっている、皆の士気が下がりはなしてしまおう」

と、岡山警部に次郎は言った。

「そうしよう、次郎さん午後には捜査会議を設けてある、何かあれば皆に伝えておくが」

「午前中の取り調べで、計画的犯行と小生はみた。又、組織犯罪のようにも見える、バックに大それた組織があると想うが、皆はどう見たかだ」

「次郎さん、了解した会議で話してみよう」

お昼だ、ジャー又と言って次郎は調布署を後にした。

いっぷくに戻った、席は略埋まっている、カウンター席端のまりのトンボが開いている。

「お帰り、お昼、今作るから待っててね」

とまりが言い、次郎は目で頷いた。

出来る間、函館から今日までを、パソコンに整えつつ、キーボード叩き始めた。

B M Wのサイドカーとモスグリーンのミニが小金井署に入った。署内入り口で杖突棒を持った警察官が、アレツとした表情だ。おまけにサイドカーから降りたマキとカナは、春とは言え寒さ感ずる今日、超ミニに超短パン、お巡りさんも目のやり場に困っている様だ。

ミニから次郎とケンジが降りた、お巡りさんは要約落ち着いたか次郎達に敬礼する。次郎はおはようございますと言い署内へ、第一応接室に通される。多人数用の応接セットが置かれている。程無くして粕谷和久警部補と蛭田仁巡查長と春日井真矢巡查の三人が入って来た。次郎は立ち上がり例の名刺を差し出した。

「谷端次郎です、宜しく願います」

と、マキとカナも遅ればせ時と、週間平成の名刺に携帯ナンバーを記入した名刺を出した。

「私が本件を担当する粕谷和久です、私の隣から蛭田仁巡查長と春日井真矢巡查です」

各々、名刺を出して自己紹介を終える。

「あつ遺憾忘れる所だった」

次郎がしゃべった。カナの隣はケンジと次郎が言い始めた時、警部補が制した

「存じ上げております、柔道世界チャンピオンの田川健次郎さんですね」

と警部補が言うと、蛭田仁巡查長と春日井真矢巡查は頷いた。

「ケンジも有名人やな」

「これも次郎さんと元八方面白バイ隊で、コーヒーショップいっぷくのまりさんのお陰です。アツシに出来る事は何なりと申し付けて下さい」

ケンジは警部補さん等に座ったままだが深々と頭を下げた。それを見たカナも深く頭を下げる。蛭田仁巡查長と春日井真矢巡查はケンジやカナの仕事に戸惑い気味だ。

ここでコーヒーとケーキが運ばれ来た。

総務課の婦警さんだろう、マキとカナを怪訝そうな顔をし見ている。

「ありがとうございます」

マキとカナは礼を言った。

「三人共武術はチョー逸品です、聞きたければ個々に質問して下さい」

と次郎は言い、粕谷警部補に向き直り、

「本題に入りましょうと促した」

「では私から今までの経緯を話そう」

と言った時、粕谷警部補はマキに向き一呼吸空けて話す。

「マキさんは、何時ぞや八丈島で、大男二人を一撃で倒したマキさんですよ
ね」

次郎はそんな事如何でも良い、本題に行こうとでも言いたげな顔を作った。
マキは顔を崩し警部補さんに言った。

「だって、二人の旅行者がかわいそうだったのよ、想わず身体が動いちゃっ
た」

「マキさんの武勇伝はここにも届いた」

と警部補は言い、数枚の書類と手帖をテーブルに置き、真顔になった。

「次郎さん、我々の手元に届いた事柄から話そう。大里麻衣は小金井市に
居住する主婦で、夫が営むアンティークショップ店を手伝う、夫は買い付け等
で月の半分は東京にいない。店は高級志向のお客さんが多い、夫の留守は、
午前十時から午後七時迄は、店番やら電話の応対で忙しない日々。それ以
外は自分の時間だ。」

薬物受け渡し、最近では封書便利利用もしている様だ。アルコールが好きらし
く吉祥寺や三鷹に出て一献傾けている。カラオケへも行くそうだ。だけど反
社会的な様な人を、良く連れていると言う、これからの調べでそれは解明で
きると思う。北海道へは一週間の予定で旅行、釧路に到着して知床半島へ
行き二泊、釧路に戻って翌朝阿寒湖方面へ行き、その日の午後七時発の札
幌行きおおぞらに乗車予定となっていた。夕方、阿寒湖方面から戻り空港駐

車場で一息ついた。そこで毒殺された」

「その時一人だったか他に乗車する人物はいなかったのか」

次郎は尋ねた。

「釧路署からは大里麻衣一人と聞いている」

「毒殺とあるが自殺では」

「自殺なら薬物を入れた容器が転がっていてもいいが見当たらん、まさか本人が飲んでから捨てたとは考えられない、家族の話では本人が全てを企画立案したと言っている、小学生の息子さんは、お母さんはルンルン気分でキーボードを叩いていたと言っている。それだけ北海道旅行を楽しみにしていた、それが自殺とは考えられない」

「空港駐車場の防犯カメラは如何でしたか、レンタカー会社では一人か二人だったか、何と言っているか」

「その辺はこれからだと言ってきている、指紋を採取すると聞いているので進展があるかもしれん」

「釧路港での漁船炎上とは関連はどうだろう」

「そっちの方は釧路署とのやり取りはない、次郎さんはありと見ているんですか」と、粕谷警部補は聞いた。

「時同じして起きている満更、単なる自殺ではないのでは、しかし今の所小生は分かりかねている」

「漁船は土田太郎所有八戸漁港第二山葉丸と分っている。何故、八戸の漁船が釧路で岸壁に激突、爆破したのか謎は残る。が現在釧路署では自殺と暫定している」

「大里麻衣の夫、一成さんによると、麻薬ブローカーの件は寝耳に水だそうですね。閉店後飲みに行ったり、カラオケへは行っているのは知っているが、まさか麻衣が麻薬ブローカーとは知らなかった。驚きの表情を隠せなかった、と言っていた」

「カラオケ店は個室だ、薬物の受け渡しは容易にできるのでは又、飲みに行った先々でも受け渡しは可能の様だ」

「家宅捜査した時、麻衣の部屋で小さめなバックに、大麻とシヤブが入っていた、他には何もなかった、それでも小分けすれば相当人数分はあった」

「アンティークショップからは薬物は見つからなかった。同居する親からも驚きの声頻りだ、私感だが、ラインやSNSで暗号を用いて取引してたんでは、携帯が見つかっていないので何とも言えん、電話局に通話記録を取り寄せ中、よって取引先の解明が出来ると思う。又、時折引き連れていた非社会的風な男のモニタージユ、居酒屋等の協力で作成予定」

「結局、大里麻衣はマトリの手が近づいた、よって毒殺が濃厚の様だ」

「次郎さんその通りだ、組織を守る為トカゲの尻尾きりだよ、だけんど夫を始め、同居人にも知られずに、何年もやっていたかは知れん、が大胆と言うか大したもんだ」

マキとカナ、ケンジは警部補と次郎の会話を頷きつつ聞き入っている。

「明日、釧路に二人の刑事を行かせる、更に現地情報が分かると思う、そんな時、又次郎さんに連絡を取ります」

「調布署も、函館で東都地検職員が銃殺された件で、刑事を函館南署へ送るようです。函館の銃殺、釧路での毒殺、それと漁船の岸壁激突炎上、この

三つの事件は繋がっているのではないか、小生はそう想っている。三つの後ろにどでかい組織があるのような、警部補さん私感だが如何かな」

「わしには今は何とも言えん、もしそうだとしたならば大変な事だ、その時は次郎さん頼みになってしまおう」

粕谷警部補は、次郎の顔を覗き込むように言う、マキとカナは何故か興奮めいた顔つきだ。

「次郎さん、何か根拠があつての事だと想うが、それは」

「今後、其々の所轄から詳細が出てくると想うが、函館の射殺、釧路の毒殺、漁船岸壁激突炎上、この三つの事件の被害者は直ぐ判明した、しかし被疑者は分からず仕舞い、被疑者の痕跡等は見つからん、函館銃殺の被疑者はどっから来てどこへ去ったのか、釧路の毒殺も被疑者は空港の防犯カメラにヒットはせず、あつて然るべき薬物は見つかっていない。漁船は証拠物件になる様な物は、全て燃えてしまっている。現時点では確証は持てんが、被疑者は証拠は残さなかった、言わば完璧な殺害を実行した、入念に計画した犯罪だと想う。だけんど、完璧過ぎる犯罪こそ疑うよち多分だ」

「我々は大里麻衣の家族、交友関係を更に調べなおそう、それと夜の行動を徹底的に捜査してみる次郎さん、他に何かあれば言ってくれ」

「釧路へは捜査員を送る予定は」

「今日の午後便で二人の捜査員を送る、進展を期待している」

「現地へ出向くと肌伝に伝わる話が出てくる、小生も進展がある筈と想う。小生はプロの皆さん方の邪魔はせん、行き過ぎがあつたならばその都度指摘して下され」

「次郎さんに指摘なんぞあろう筈はない、次郎流に捜査して下さい」

頷く様にマキとカナは更に身を乗り出して聞き入る。次郎は腕時計を見ながらお昼になってしまった、情報交換は密にと言いつつ次郎達は小金井署を後にした。

いっぷくに戻った次郎達をまりがお帰りと言った。

「今お昼作るからと言った」

皆、そのつもりでいた様だ。昼時だ八割がた、いっぷくは埋まっている、次郎はケンジを促し隅っこのテーブルに腰かけた。マキとカナは出来たもんだ、厨房に入り棚から割烹着を出した。

「まりさん何作ろうか」と聞いた。

「スパゲティとサンドイッチで行こう、材料は右の冷蔵庫に入っている、お願いね」

マキとカナは慣れたもんだ、瞬く間に大皿にナポリタンとサンドが盛りつく。パクつきながら小声で小金井署での粕谷警部補の話の整理し始めた。大里麻衣の身边を、もっと知る必要がある次郎は結論付けた。

「昨夜あった、誠一さんからの情報はいつ入る」

とカナが次郎に向き直り聞いた。

「あいつの事だ明日明後日には、情報を持ってくると思う、岡山警部補も空き巣犯小泉昭一についても、詳細を連絡し来る手筈になっている。犯行後、姿をくらました向崎徹也なる人物、モニタージュも出来る頃だ。又、この人物は何者なのか調べる必要がある」

「函館での射殺事件は、難航していると想われる。片岡警部補の事、進展が

あれば言つて来る筈だ、未だ無い所を見ると苦戦極まりない、そんな所だろう。釧路の毒殺と漁船岸壁激突炎上は目下の所、小金井署から出向いた刑事さんを待つしかない」

次郎はスパゲティとサンドを口に運びながら、モグモグしながらのしゃべりだ。

「マキとカナ、おとなしくしてると、言う方が無理かもしれんが、無茶はせんでくれ」

二人顔を見合わせ、はいと返事する。

「あと一つ気になっている、理沙さんが言っていた、盗難にあつた菊田健斗さんのアルバム、そのアルバムに貼つてあつたされる六本木三丁目界隈の写真、隣りに高飛び込み台があつて六階建てのビル、このビルが何なのか、突き止めも出てこよう。そんなに大きくはないようだったと理沙は言つとつた。

誰が所有し何が為にあるのか、小生氣にはなる」

と付け加えた。マキとカナが自分等を指さし、自分達が調べてくると言つた。

「決して無茶はせんでな」

と次郎は言つた。

はいと優等生な返事が返つて来る。

「ケンジさんも行く、今日はオフでしょう」

マキが寄り添い、誘いの手を差しのべた。

「ケンジが一緒ならば小生も安心出来る、三人で頼むよ」

大皿の品がなくなった所でまりがコーヒー淹れた。

「慌てずにゆっくり飲んでね」

三人は味わっただろうか、そこそこに立ち上がりハイタッチした。

「よし行こう、行って来る」

と言ひ残し、いっぷくを出て行った。

マキの運転するモスグリーンのミニは六本木三丁目に難なく着いた。運転はマキに任せてカナとケンジは高飛び込み台を探す、表通りから一本中に入った通りで見つけた。飛び込み台の下は25mのプールが出来ている、以前は水泳教室があったんだろう、今は閉鎖されている様だ。

「一等地を遊ばしておくなんて勿体ない、持主は何を考えてるんだろう」

カナがボソボソツトと言う。

プールの右手はマンションと想われる佇まいだ、カナが降りてエントランス風玄関に入った。

「入った所に郵便受けがある、やっぱり戸別マンションだよ」

と返って来た。左手も外観はマンションの様だ、プールと隣接している、六階窓と高飛び込み台との高さは同じに見える。

「六階の窓から飛び込める」

とカナが言った。マキとケンジはうっおっつと、訳の分からん声を発する。ワンフロア百平米位、然程大きくはないビルだ、外観からして一階はエントラントと駐車場になっている。

又もやカナが様子見てくると言いビルに、駐車場は15台程度止まれるスペースだが3台しか止まっていない、防犯カメラが2台設置されている。駐車場の右側にエレベーターホールと階段、ホールの脇に各階の表札と郵便受

けがついている。カナは表札を見、素早くメモった。エレベーターが動いた、誰か降りてくる、カナは足早にミニに戻る、マキはそのビルから少し離れた所にミニを移動させた。遠くだが反社会勢力風な男二人が、道路に出て来た。マキが望遠で捉える、男二人はビル前でうろつき始めた、僅かして何もなかった如く、ビル内に消えた。

「防犯カメラがあったよ、自分が駐車場内を歩き回っているのを見、調べに出て来たんだろ、このビル何かあるな」

カナはキーツと唇をかみしめた。

「カナちゃん表札には何と記されていた」

「2階と3階は昭和建設、4階は畠田智樹弁護士事務所、5階と6階は二瓶企画となっている」

「カナちゃん、ここの住所は控えたよな、このビルを角度を変えて数カット撮ろう、撮ったら今日は戻り次郎さんに報告だ」

とケンジが言った。

マキとカナは素直に返事す。報告を受けた次郎は、午後七時に志田やに個別集合と伝えた。次郎が志田やに着いた時は誠一以外は揃っていた、アルコールはまだと言うのに、マキとカナにケンジはYYとやっていた。オスと言い皆のテーブルに着いた。

「誠一も間もなく来るだろうそれからカンパイしよう、良いだろう、つまみ等々頼んどいてくれ」

「よっしゃ」

とマキは品書きを開いた、年齢不明なお嬢さんに次々に告げる。

誠一が遅くなりましたと入って来た。

「そんなに遅くないよ、小生も今来た所だ、遅くなりましたと言うなら、マキとカナにケンジに言っといてくれ」

誠一は三人に頭を下げた。生が運ばれて来た、次郎はカンパイは誰にすつかと三人を見た、無論、自分でしょとマキがグラスを持ち立ち上がった。

「カンパイは終わった、如何だい誠一、情報は」

と次郎は振った。誠一は喉が渴いていると見え、続けざまにグラスに口付け一息ついて次郎さん、と向き直った。

「先ずは大里麻衣の掴んだ情報を話そう、週のうち四回は程度は吉祥寺、三鷹に出ている。パチンコやカラオケ、居酒屋に出没してる。主人が営んでいるアンテークショップ、雇人もいるが主人が欧州へ買い付けの際は店に良く顔を出している。状況を判断して店番に頼み外出している様だ、居酒屋は兎も角、昼夜に関わらず出向く」

「他人事とは言え、アンテークショップは、金額も張る物もあろうかと想うが雇人に任せて大丈夫なのか」

「聞き入れた所によると、在庫管理は徹底している、そして先にも言ったが状況を判断して出かけている。従って雇われ人は小物一つ誤魔化し様がない。次郎さん、あそこに素浪人と札の下がった魔王の管理、その都度鉛筆で印を付けておくんでは」

「誠一、止してくれ小生の趣味じゃー無い」

「そんな次郎さんだからこそ、大勢集まって来るんだよな」

「誠一、口が滑らかになつて来たよな、誉め言葉も小生の趣味じゃー無い次

を聞かせてくれ」

「パチンコ店を始め其々3、5店舗に出入りしている、店員に聞いた所、目立った薬物の授受は確認できていない。反社会勢力と想われる男は常時とは限らん、一人で何時までもパチンコに興じている日もある」

「大里麻衣が行きつけのリストは出来ているか」

「次郎さん、あつしを誰だと想ってたんだ、ほれこれがリストや」

次郎は誠一に相すまん、と言いリストを受け取った。二重丸は頻繁に三角は月に一度来るか来ないかだ、フロントに写真を見せたら直ぐ答えが返って来た、次郎さん達が行って聞き取りも可能だ。又、反社会勢力風な男は不明としか返ってこなかった」

「有難う、明日から聞き込みに入るとしよう、魔王と美味しい魚介類を堪能してくれ小生、魔王の残り具合常にチェックはせんぞ、空になったら追加してくれ」

「次郎さん、遠慮はせんよ」

それから写真を見せる、マキと言った。

「昨日六本木で撮った写真を誠一に見せてやってくれ」

と次郎は言った。マキはどの様に購入したかは不明だが海外の一流メイカーバックをごそごそし、2Lの写真2枚を誠一に渡した。誠一はアツと声を発する。

「次郎さん、大里麻衣が引き連れていた男はこの男だよ」

次郎の前に1枚写真を出した。一瞬空気がピーンと張りつめた、それもそうだ何の手掛かりもなかった次郎達、大きな進展があった。

「間違いないこの男だ」

と誠一は強調する。マキとカナにケンジは、代わるがわる写真を手に取り確認した。

「この男は何者かだ、六本木と言えば大泉警部補、否、今は本庁捜査1課の課長大泉警部、大さんなら何か分かるかもしれん、いつぶくに戻ったらフアックスしておく、良い返事が返ってくると期待しよう」

次郎とマキが、神妙な顔して言い始めた。

「自分達は次郎の装飾品ではない、チームいつぶくのメンバーだ。自分達に仕事と言うか、捜査をさせて下さい」

次郎は、ジョッキを飲み干し言い出した。

「皆を危険に晒して迄手伝ってくれとは言わん、マキ分かるだろう、言っている事が、人命第一や、そしての実実究明だ、その辺を弁えてくれ。それと本職を疎かにしてはならん、カナもケンジもそうだ」

数秒の空白があったが、カナが口を開いた。

「自分も今まで通りケーキ作りに精を出します、ケンジさんもガードマンとして警備を疎かにしないよね、又早朝のマキちゃんとの稽古も疎かにしません」

「カナちゃんの言うとおりだ、マキちゃんに置かれては、幼稚園ナンバーワンの先生と聞く、これからも通常勤務が常だよ、俺も日々の警備を疎かにする事は俺の中にはない」

とケンジが言いきった。

次郎は、皆宜しく頼むと言い大将に魔王を取ってもらった。マキが慣れた

手つきでロックを作る。もう一つクロヒヨウとマキに注文があると次郎は言い出した。

「小生と一緒に時は別とするがその何て言うかな尻だしルック、豊かな胸は否定はせんがなんちゆかな、捜査に行く時は服装に注意してくれ。刑事もののテレビでやってたろ、おかしな刑事、そのエリート警視の岡崎真美とか警視庁捜査一課の大福いや平井真琴警部補、そんな服装がベターだがワイドパンツ、ストレッチパンツ等々、スカートはせめて膝辺りまで、胸が開けていないシャツ、それにジャケットやジャンパー、要は必要以上に肌は出さん服装で頼む、今のような服装だと相手に軽く見られ軽くあしらわれてしまう」

そんな次郎の言にマキはロックを作る手が止まりクロヒヨウは自分の容姿を見直した。

マキが言い出す。

「自分はそう言った衣服は持っておらん、新たに揃えたら幾ら掛ると想ってんの次郎、出してくれんの」

「まー、期待しないで待っててくれ」と次郎はその場を凌いだ。

暫く沈黙が続いたがマキとカナに平常心に戻った。

カナが言い出した。

「六階建てのあのビル、確か二階三階は昭和建設、四回は畠田智樹弁護士事務所、五階と六階は二瓶企画となっていた」

そうカナが言い終わらないうちに次郎が制した。

「四階は畠田智樹弁護士事務所と言ったな」

次郎はカナに確認するように言った。

「そうだよ表札には畠田智樹弁護士事務所と記してあったよ」

「畠田智樹は確か菊田健斗の葬儀に東都地検のメンバーと一緒に来ていた、どんな繋がりがあるんだろう」

次郎は宙を見ながら独り言のように言う、今度はカナが二瓶企画とあったが業務内容は何なのか、首を傾げて言う。

「昭和建設、畠田智樹弁護士、二瓶企画、これらを本庁捜査一課の皆さんに確認とってみよう」

と次郎は言いスマホをとった。繋がるかなーと言いながらプッシュし始めた、大泉警部と出た、次郎ですと受けた。

「鬼デカさん、ご無沙汰だな息災かい、どうしておった」

「一年ばかり山に籠っておった、十日程前に戻ったばかりや」

「又、戻って早々事件を抱えたかへ」

「話せば長くなってしまおう、電話では話が通じない所も出て来てしまおう、

警部昇進と捜査一課長就任祝いもまだだ、いっぷくに来ては貰えんだろうか」

「次郎さんの頼みじゃー断れん、明日の帳の頃ではどうだ」

「よっしゃー、それでいい待っている」

「わしに聞きたい事があるんだろう」

「触り程度きかせてくれんか、北海道函館での射殺、釧路での毒殺だ」

「その件は小金井署から届いている、詳細を持っていこう」

次郎の宜しくお願いしますで電話は終わった。

「次郎さんてさすがだね、捜査一課長を呼び出すなんて」

誠一は言う。

「どっから手に付けるかな」

次郎は皆の顔を見た。マキが言い出す、

「六階建てのビルも気になるが、麻薬バイヤーが立ち寄ったされる、カラオケ店や居酒屋を当たるが先だと想う」

「よっしゃー、クロヒョウと分担して当たってくれ、二人で回ればそれだけ多くの情報が、早く手に入る」

マキとカナは任しとけばかりに、親指を立てタッチす。誠一も今後情報集めを続けるとVサイン、今宵も二時間が経過した、マキにカードを渡し呑み過ぎんなよ、じゃー皆、後は宜しくと言い次郎は立ち上がった。

二人は、打ち合わせしたのか昼過ぎに、マキとカナはいつぶくに来た。ベージュとライトグレーのスーツで決めている、インナーはそれに合わせた色合いだ、パンツはややワイド傾向。元々均整の取れた二人だ、これで街を歩けば、大勢の男どもが振り向く事だろう。まりは、淹れたてのコーヒーを二人に出した。

「二人ともピツシツと決まっているじゃん、次郎が驚くよ」

「まりさんのパンタロンスーツには及びません、まりさんに追い付け追い越せです」

「私はどっちかと言うと、おばあちゃんの部類、二人には敵わないよ」

そーこー言っておったら、次郎が降りて来た。

「おっ二人とも、もう揃えたのか、お似合いだぞ」

「取敢えずクレジットカードは返します」

マキが言い、話は続いた。

「昨日は早めに切り上げ、ケンジさんと誠一さんに同行してもらい、洋服店に行って来ました。色合いと言い、インナーと言い、文句ないでしょ、ケンジさんと誠一さんの意見も入っています」

次郎は相分かったと言い、マキとカナのテーブルに着いた、徐に尻ポケットから封筒を二人の前に出した。

「小生とまりからだ、少ないが洋服代にしてくれ」

とまりに目配せしながら渡した、他の客がいるのも忘れ、二人は大はしやぎする。

「次郎、ありがとう次郎好みの洋服揃えるから」

二人は口々に次郎とまりにお礼を言う。ケンジも入って来た。

「一課長さんが来ると言うので、のんびりはしちゃーおれん、昼まで夜通しの勤務だった、寝ちゃーおれん、そんな訳で来てしまったよ」

ご苦労さんと次郎は言い、ケンジに向き直った。

「ケンジ、今二人に洋服代を渡した、ケンジにも渡さんと不公平と言うもの、まりと小生から洋服代だ、取っといてくれ」

「えっ俺にも」

「ケンジは大きいし探すのが大変だろう、チームいっぷくは制服がない、制服代と想って取っといてくれ」

「ありがたく頂きます、まりさん、二人のスーツ決まってるだろ、俺の意見も入って入るんだぜ」

「サイズも良く色合いも決まってるよ、ケンジさんセンスいいね」

とまりは言いコーヒーを持ってきた。次郎は皆お昼はまだだと皆を見た。

「まり、湧水はまだ混んでいるかな」

「昼は終わっている時間だから大丈夫だとおもう、今電話入れてみます」

「はい、湧水です」と女将の声がする。

「いっぷくですが今はどうですか」

「うああ、まりさん元気してる、次郎さんは見つかった」

「はい見つかりました、その行方不明者が行きます、一テーブル用意して頂けませんか」

「おいきた任しといて、お待ちしています」

「女将は何時も元気だな、今日はとつちめられるかな」

「次郎は何所行った、見つかったかと再三コーヒー飲みに来ていた、何と云われるか覚悟しといて」

「おっかねーな、マキは女将と顔なじみだろ、フォローしてくれない」

「その件に関しては静観させて頂きます」

厨房にいるまりの肩が、小刻みに揺れているのが次郎一人、気付かなかつた。四人は暖簾をくぐった、仲居さんがどうぞこちらへと案内する。女将がお茶と品書きを持ってきた。

「あーら次郎さん、いっぷくから湧水への道順、お忘れになさいましたの」

「いやー、女将ご無沙汰ばかりで申し訳ない、山に籠つとったんだ、まりにも知らせずだった」

「まりさんは、明るく元気印だから心配せんかったが、まりさんは死ねば連絡があると想う、連絡が無いのは息災でいる。そんな風に言っていたがいさ

さか」

「女将、お叱りはこの辺でご容赦。二人を紹介しよう、小生の向かいが寺島加奈、ケーキ職人で吉祥寺に自分の店を所有、斜向かいが田川健次郎、ガードマンです。質問があれば直に聞いても構わん」

「女将、注文を先にしてくれ」

「次郎さん天ぷらそば大盛りでしょ、もう仕込み始まっている、間もなく仲居さんが運んでくると思う、あつ来た」

「と言いい女将は帳場に戻った。」

「次郎さん久っさしりですね、何所へ行つとつたと」

「配膳しながら仲居さんが行った。」

「いま女将に突つつかれたところです、山籠もりしてました」

「山籠もりつて、誰もいない所で一人、寂しくなかったの」

「と言いい、配膳を終わらすと仲居さんは去った。」

「サー食べよう」と次郎は言った。

マキとカナが、新調を気にしつつ食するは、何時もとは勝手が違う様だ、何時もなら胡坐をかくのだが、今日はきちんと正座している。いつまで持つかと次郎は独り言。あー美味しかったとマキとカナ、ちよつとタイムと言いい足を投げ出した。次郎はニヤリとせずにはいられなかった。

「大さんはどこ迄情報を提供してくれるかな、守秘義務とやらもあろうと思うが、皆はどう思う」マキが手上げた。

「全部教えてくれるよ、だって鬼デカさんだもん」

「小生は今は警察手帳もない一市民だ、大さんと言えども、丸秘も多いと想

う、どこ迄しゃべってくれるかな」

「意外と多く語ってくれると想うだつて、電話一本でいっぷくまで出向いてくれるなんて、普通じゃー無い、土産沢山持ってきてくれると想う」

何時もになく、カナが興奮気味にしゃべった。食後のお茶を飲んでいると次郎が皆に話しかけた。

「どうだ、深大寺へは行った事はあるか、行ってみつか」

三人は顔を見合わせ行きますと返って来た、次郎は帳場にカードを出し支払いを終えた。

表通りに出て左に歩き出した、何時もの様にマキは次郎の腕を掴み歩を進める、ケンジとカナもそれなりにカップル風。バスの折り返し所の所で又左に曲がった、角は鬼太郎茶屋だ。

「鬼太郎ってあの鬼太郎」

と、マキが次郎に聞いた。

そうだ、そのゲゲゲの鬼太郎だと次郎は言った。

「作者の故水木しげるさんの出身は鳥取県です、だが四十年以上調布市に住んでいた、調布市は第二の故郷と言える。そんな訳で鬼太郎茶屋が開店した。妖怪グッツが所狭しと並んでいる、喫茶席もあり、よく鬼太郎ファンがソフトドリンクを嗜んでいる、深大寺を一回りしてみつか、参道を進んでみよう」

ケンジが言い出した。

「マキちゃんカナちゃん、お蕎麦で満腹かい、ここかしこにお二人好みの食べ物がある、あのソバ饅頭なんか美味と想う」

「ケンジさん何言ってるの、一回りすれば別腹と言うか、空気が出来る次郎、この道戻って来るんだろ、そしたらあれを買って帰ろ」

それ聞いたケンジは、返す言葉が見つからなかった。参道を行きついた所が山門、このかやぶき屋根の建物は、江戸時代の大火にも合わず、最古のままの佇まいです。次郎の説明は続く、線香が束ねたまま煙るは常香楼、この煙を身体の悪い箇所にて手で招き擦ると、あーら不思議と、治ると言われる」

「次郎さんほんとですか俺、頭によーく擦ってこつと」
ケンジの言に皆は笑う。

「先ずは本堂にお参りしよう、梁には立派な彫り物が施されている、ここは千六百四十六年と千八百六十五年に火災に遭い堂宇の殆どを焼失してしまった、現在の本堂は大正時代に再建された、因みに阿弥陀三尊像はここに安置されている。お賽銭を上げ、願い事をお願いしよう」
分かったか分からんのか、マキがふーんと発した。

「堂宇って何よ」と言う。

「簡単に言えば庇の事だ」

「それなら庇と言えればいいじゃん」

「お寺流に言い方があるんだよ」

「次郎、お賽銭は誰が出すの」

とマキ節が炸裂する。

「お賽銭は自分で出してこそご利益がある、マキ、お賽銭は自分で出せ」
と次郎は半ば諦め調で言った。

次は元三大師堂へ行ってみよう、左方向へ皆を案内す。

「厄除けの多大な力を持った、元三大師像が祀られている。江戸大火後、いち早く再建されました」

お参りし本堂の前に出て来た。

「出口左方向に釣鐘堂があります。毎日、朝昼夕三回鐘が突かれる、因みに大晦日には除夜の鐘を鳴らします」

次郎は歩きながら淡々と話す。大型なカメラを持った、洒落た格好の年配さんが近寄って来る、何か根拠があるのか間違えたのか、写真を撮らして下さいと、小生等に断る由もない皆は会釈しながら、ハイどうぞと。マキとカナは慣れたもんだ、頻りとポーズをとる。境内に連写音が鳴り響く、何事か分からん参拝者さん等も、コンデジで写真を撮った。

「確かあなた方は、参道を右に行った所にあるコーヒーショップの皆さんでございませんか」

「はい、私達はいっぱくの関係者です、そばにいるのに来た事がないよって、皆でお参りがてら来ました」

「コーヒーを飲みながら、スタイル良しカメラ写り良し、そんな事を想っていました。今日境内で見かけました。寺院と今風なお嬢さん、そんなタイトルで撮影しよう、思いきって声を掛けました」

年齢不明はおじさんは、次々と注文を付けて来る、その度にマキとカナはポーズをとった、連写音頻り。

「いい写真が出来る筈です」

と言い、ハイカラ年配さんは、

「ありがとうございます。仕上がりましたら、コーヒーショップへお届けし

ておきます。参道の方をもう少し撮ってきます、では、いっぷくで」

と言ひ参道方へ落りて行つた。サプライズに参拝者はもとより、次郎達も啞然とした表情だ。気を取り直して、次郎がゆつくり歩を進め解説は続いた。開山は七百三十三年、天平五年、深沙大王が祀られた。厄除け、縁結びの寺として名高くなつた。二度の大火後、天台宗へ改宗される。尚、三月三日、四日はだるま市が行われる、大師様のご威力に肖ろうと境内は露天商と参拝者で大賑わい。

「まだ一年近くあるが、そんな時は連れて行ってよ」

と、マキは組んでいた次郎の腕を引っ張つた。

「相分かつたと言わんの」

カナとケンジは、声は出んが肩が笑っている。

山門を降りた所に、煎餅と団子が食欲を誘う匂いが漂う。マキは次郎を引っ張りつかつかつと寄つた。他人には目もくれず煎餅と団子を注文する。

「らっしやい」と年齢不明なお嬢さんはマキを見た。

「あら、マキちゃんじゃーないの、今日はおじいちゃんとお参り、優しそうなおじいちゃんですね、マキちゃんも幸せもんだ。はい、注文の品全部入つたよお代はおじいちゃん」

「はいそうです」

次郎は苦笑しながら尻ポケットから財布を出した。いっぷくにコーヒーを飲みに来てくれたお巡りさんが警備していた。

「おおつ、いっぷくの殿と重臣の皆さん、今日は揃つてお参りですか」

「近場にいるのに、来た事がなかったんで、皆と一緒にお参りに来ました」

「皆さん、よござんしたね、良い事がいっぱいありますよ」と言い始めたが、真顔になった。

「先程、境内で詳細は分からなかったが、キヤーとかワーとか大勢が喚いているようだった。駆け付けようとはしたが、本管は山門下が警備よって、指示が出なければ動けんかった」

何事かを、次郎は本管に説明した。

「アマチュアカメラマンに捕まってしまった。それはそれは聞こえたように大騒ぎになってしまった、仕舞いにカメラマンは、今風なダンスミュージックを流した、マキとカナはダンスはお手の物、ジャケット脱ぎ捨て曲に合わせ五体をくねらせ、跳びはねリズムをとった。エンドは其々にY字バランスとI字バランスで締めた。ケンジは元柔道世界チャンピオンと判ってしまった、お姫様抱っこ撮りのオンパレード、年齢不明なお嬢さん方は必要に、抱っこ撮りを要求、ケンジも渋々頭を掻きながら応じた。小生は急遽カメラマンになっってしまう。そんなこんなで大騒ぎになってしまったよ」

騒ぎを気に掛けていたお巡りさんも納得。予定より大分時間を食ってしまった、そこで昼タイムは終わった。

いっぷくのドアを開けて皆は中に入った。

「大分遅かったじゃないの」と、まりは言う。

「何故遅かったか皆に聞いてくれ」

と次郎は言った。

マキとカナは喋り捲った。

「その人きつと隅っこに座って、コーヒー啜りながら今日の成果を確認して
るんだろう、頻りとデジカメ画像を確認するが如く観ている。きつとその人
だと想うよ、あつ大さんが五分程前に電話があつた、今調布駅に着いたタク
シーで行くと言っていた、もう来る頃だよ」

ちゆわーと言って、大さんが入って来た。

「ご無沙汰ばかりです、駅前でアイスを買ってきた、溶けんうちに食べて下
さい」

はーい頂きますとマキは受け取った。

「マキちゃんはいつも元気だね、病氣知らずとやらだ」

「時折腹痛を起こす、そうなってしまおうと誰も手におえず、周りはただ見つ
めるだけ」

「背中摩ってくれたって良いじゃん、大丈夫かと声かけてくれたって良いじ
ゃん、皆そっぽ向いているだけ薄情なんだから」

皆は笑いを堪えるのに四苦八苦。五時から再開店する、話を始めよう。次
郎は、テーブルをくつつけ、場を作った。

「ジャー次郎さん、一年間の籠城生活は後に聞くとし、早速本題に入るとす
つか」

「次郎さん、これらが函館と釧路の書類だ、見てくれ。だけど、次郎さんが
知っている事しか、載っていないと想う何故かだ、捜査が進展していない、
捜査が行き止まっている。函館での射殺事件は現段階では裏社会の犯罪では
ないと想う又、菊田健斗さんの奥さんの実家、北海道留萌市の網元、飯島
達郎さん絡みの、営利犯罪でもなさそうだ。釧路空港での毒殺事件、こつち

もお手上げ状態、同乗者がいて、毒殺と見ているが同乗者が出てこない」

「出てこないとはいかように」

と次郎は聞いた。

「そこにも記されているが指紋がない、レンタカーは掃除の際内側も拭きあげている、運転席側に大里麻衣の指紋だけ、他に幾つかあったがレンタカー会社職員のだった。空港内、空港駐車場の防犯カメラには同乗者らしき人物は皆無、尚レンタカー会社職員によると助手席のマットに少量の砂があったとされる。誰によって持ち込まれたか、大里麻衣が休憩の際助手席でとりその時持ち込まれたのか、何所の砂であるか今分析中」

大さんは、坦々と話すも目は光っている。次郎が漁船の方は如何かなと書類に目を通しながら大さんに聞いた。

「八戸漁港第二山葉丸、所有者は土田太郎、漁港の近くの一軒家に母親と二人暮らし、父親は出漁中に不慮の事故で亡くなっている」

「不慮の事故はどんな事故」

と次郎は来た。

「夜間仲間と出漁中、突如海が荒天し漁船は激しく横倒しになった、その時船首で作業にあたっていた父親は海に投げ出されてしまった。真っ暗闇、見つけど見つからず仕舞い」

「小生も、夜間にヨットを操った事はあった、真っ暗闇、落ちたら見つけっこない、そうすると今は土田太郎の家族は母親のさだ子だけ」

「そういう事になるな、八戸署へ詳細をお願いしてあるが、周りとの付き合いは良い方ではない様だ」

「何故に八戸の漁船が釧路に来ていたのか、いまん所不明だ。全部燃えてしまった、何一つ手掛かりになるような物は、出ていないと言っている」

「目撃者は居なかったのか、どの書類にも無しとか、無いとか記されている。次郎さん、目撃者が居れば、各署もこんなに苦労せんと想う、事実目撃者が居ないんだよ」

「大さん、小生想うに、三つの事件は目撃者を作られない様に、企んだ犯罪ではないのか」

次郎さん、それはどの様な事と大さんは尋ねた。

「早く言えば、この三つの事件は巧妙に計画された完全犯罪だ」

「えっ、次郎さんは三つの事件は関連しているとしても」

「その通り、間違いなく繋がっている」

「捜査一課としては今ん所、所轄からの報告を待ち、必要に応じて係員を出向く所だ、次郎さんの動向を加味して対処いたす、縦しんば繋がっているとすれば、危険を避けるよう努めてもらいたい。なんせ相手は見えないし二人否、三人も殺害している」

「小生達は危険は性に合わん、市民の安全と真実追及にある」

「おっ、次郎節が出なすったな、安全にをお忘れなく、次郎さん小金井署からだが、出がけに書類が上がって来た。大里麻衣は麻薬バイヤーに相違無しと、マトリさんが追っかけていた矢先の事だったと、トカゲの尻尾きりだ。マトリさんが追っかける程重要人物だったのか、捜査員が返ってくれば詳細が分る筈、そんな時は次郎さんにファックス入れるよ」

「ご主人は骨董品の買い付けで、月の半分は海外に行っている。ご主人の留

守に薬物を売り渡ししていた様だ、居酒屋やカラオケ店等で行っていたとマトリさんは言っていた」

「その居酒屋やカラオケ店を手始めに取材する予定です。又、大里麻衣の家族にも会ってみようと想っている」

「小金井署も、その辺に狙いを付けている様だ、なんせ鬼デカさんが動き出した、先を越されちゃーならん、とばかりに粕谷和久警部補が皆にハツパをかけたとか」

「小生は警察手帳もない一市民です、そんなに偉くはない」

「おっと遺憾忘れる所だった、頼まれた例の六本木のビル、何やら怪しげに想う、5、6階から説明しよう、二瓶企画とあるがここは警備会社、業務内容は定かでない、実態は特定者の警護とある。言わば要人とかの警護を営んでいる」

「その要人とは誰の事」

次郎は聞いた。

「今二課で調べている、少し待ってくれ、それと4階は、畠田智樹弁護士事務所は、ご存じの通りじゃが、くせ者弁護士だ。麻薬売買や土地や建設におけるいざこざを、合法的に処理している」

「何の問題はないじゃん」

とマキが口をはさんだ。

「マキちゃんそう言うが土地や建設に於ける利権は一企業に渡っている」

「それどういう事、分かりやすく教えてよ」

「マキちゃんの土地がここにある、それを二束三文で買い取られたらどうす

る、建設に於いても入札はあつてない様なもの皆、一企業に落札される。そのなる様に仕組んだのが、畠田智樹弁護士、仲間内の犯罪など直ぐ、出られるようにしている」

「とんでもない弁護士だな、大さん何とかならないの」

「正当な手続きであるが故、どうにもならんよ」

「捜査二課に打診してある、近いうちに詳し事が分る、二階三階は昭和建設が入って入る、社長は大屋隆雄五十代、建設業と不動産管理を業務としている。実態は不明朗と言うか、同業者が何故に、昭和建設が請け負う事ができたのかと暫しだ」

「と言う事は、無理やり受注したとか」

「そうじゃー無い、入札何てあつてないような物、条件の良い仕事は、いつの間にもやら昭和建設に落札している。その他、立ち退きや土地売買もそうだ、嫌がらせ等々でそれらの物件を手中に収めている。そんな時も畠田智樹弁護士が絡んでいると聞く、反社会勢力風な男達も出向いていると聞いている。大屋隆雄なる人物は、二課が近日中にわしの所に、詳細を回してくれると言っていた。着たら直ぐに次郎さんにもファックスするよ」

聞いているマキとカナの目が、次郎のサンマの目より大きく輝きを増していた。テーブルに置いた書類にも、今言った事が記してある、何か質問があれば答えると言い、ここで出されたケーキとコーヒーを、大さんは初めて手を付ける。

「六本木の高飛び込みプールと、隣り合わせのビルの所有者は、大屋隆雄ではないのか、そうであればそれも、詐欺紛いに摂取したんだろう、昭和建設

と大屋隆雄を調べる必要があるな」

珍しく次郎は腕組みをし宙を見た。

「次郎さん、見通しなんだが、この先は如何なものが待っているんだろうか」

次郎は、腕組みをしながら大さんを見、言った。

「バツクには途轍もない、何かがあるような気がしてならん、先も言ったかな函館と釧路での事件、この三つは繋がっている、それに麻薬となんらかの利権も絡んでいる。小生はそう見ている、今は情報が乏しい、どんな些細な事でもいいから小生に流してくれ、小生等も週間平成の偽名刺しかあらんが、独自に捜査を始める。函館で射殺された菊田健斗、彼の奥さんの理沙さんに、東都地検の内情と言うか、仕事上に問題がなかったかどうか、聞く必要がある。今度の件はそもそも彼女達が発端だ、理沙にも真実究明に協力してもらおう」

菊田理沙とは、いかような付き合いがあったのかと、大さんは次郎に聞いた。

「健斗さん等と、女子大生を含め合コンだった、健斗さんが呼び出された、理沙はそのまま合コンと相成った。健斗さんはその晩に射殺された。一人で怖い、身寄りが来る迄一緒にいてくれと言われる。二日ばかり一緒にいたそんな付き合いだ、健斗さんが射殺された翌日釧路で二つの事件は起こった」

大さんは、うっおつと頷く。

「で、次郎さん等はどっから手に付けるんだ」

と大さんは聞くいた。

カナが姿勢を正して言い始める。

「先ずは大里麻衣の家族に会ってみる、それと大里麻衣の立ち回り先の聞き込み、それに六本木のビルに出入りする人物のチェックです」

チームいっぶくの皆さん、幾ら取材捜査しても構わんが、この先何があるか分からん、危険と想われた時、そんな時は一歩も二歩も素直に下がってくれ、これは警視庁捜査一課長からのお願いだ」

次郎は皆にハイと返事しろと言った。

「鬼デカさんだ、所轄も先を越されてはならんと想ってんだろいな、わしからもハツパ掛けんとな」